

松川浦における幼稚魚生息状況

福島県水産試験場 相馬支場

1 部門名

水産業—資源管理—マコガレイ、イシガレイ、アイナメ、メバル

2 担当者

佐藤太津真・成田薫・松本陽

3 要旨

松川浦に生息する幼稚魚の種類・分布量の変動をモニタリングした。このうち、水産上有用なマコガレイ、イシガレイ、アイナメ、シロメバルの稚魚の出現状況から 2016 年における発生水準を把握し、今後の資源動向を予測し、漁業再開に向けて資源の適切な利用方法を検討するための基礎資料とする。

(1) 2016 年 4 月～11 月にかけて松川浦の 6 調査定点(図 1)において、幅 2m・高さ 1.5m・袋網目合 2mm のビームトロール 5 分曳による採集調査を実施し、1 曳網あたりの採集個体数を求め、過去の調査結果と比較した。

(2) 2016 年 4 月～10 月の調査では 31 種 1,601 個体が採集された。採集個体数が最も多かったのはアサヒアナハゼ、次いでスジハゼ、シロメバルの順であった。出現魚種組成を過去の結果と比較すると、種数に大きな変化は見られず、ハゼ類の密度が高い傾向は同じであったが、2015 年には確認されなかったシロメバルが 4～9 月の期間中に高密度で採捕された。

(3) 2016 年 4 月～11 月の有用魚種の当歳魚採集個体数は、アイナメ 14 個体、イシガレイ 44 個体、シロメバル 135 個体、マコガレイ 114 個体であった。2016 年級の重要魚種の採集密度は、シロメバルは過去 10 年で最も高い値となり、発生水準は高水準であると考えられた。マコガレイについても、2008 年、2010 年の水準は下回ったものの、震災以降最も高い値となったことから、中～高水準と考えられた。イシガレイは震災後低水準横ばい傾向で推移しており、本年については前年の密度を上回ったものの、震災以前の水準に比べて低く、依然として低水準と考えられた。アイナメの採集密度は安定して推移してきたが、本年については前年の密度を下回ったことから低水準と考えられた(図 2)。



図 1 調査定点

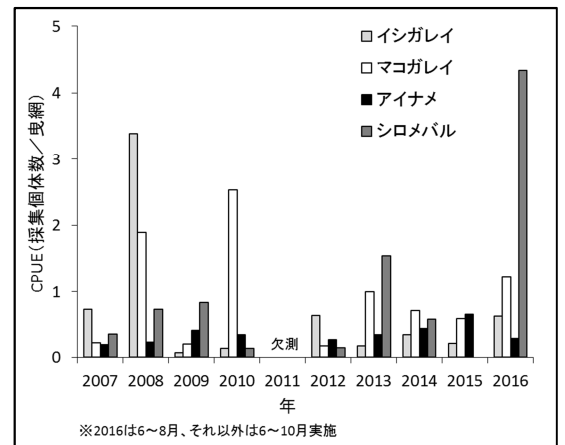


図 2 当歳魚採集密度の推移

4 成果を得た課題名

- (1) 研究期間 平成 23 年度～28 年度
- (2) 研究課題名 松川浦の増養殖の安定化に関する研究
- (3) 参考となる成果の区分 指導参考

5 主な参考文献・資料

- (1) 平成 8 年度～27 年度福島県水産試験場事業概要報告書